

あのとき君は若かった

米田 進一

2005年5月19日の早朝、大阪の中国道吹田入り口付近で大型トラックとの接触事故に遭ってしまった。頸髄を損傷し、入院して間もなく人工呼吸器（以下、呼吸器）を着けられ、身体が全く動かなくなった事や、自由を失った事に生きる気力を失い、人生が180度変わった瞬間でした。その為、現実を受け入れられない日が続き、これから先、一生この身体と付き合わなければいけないと思うと、何もやる気が起こりませんでした。数ヶ月後、関西労災病院に転院してから、主治医である土岐先生の紹介で、初めて病院で出会った頸損者は故池田英樹さんで、彼は私と同じ呼吸器を使用した先輩でもあり、年も近く心の支えになる良き理解者でした。在宅生活になってからも月に一度の定期受診日も同じだったので、色んな情報交換をしました。当時の生活スタイルはヘルパーを利用することに対し抵抗があったので、家族だけで介護をしていましたが、自分の将来の事を考えるとヘルパーを利用するタイミングとしては良い転機となりました。

その後、頸損連絡会に入会し、呼吸器使用者が集う「市民公開講座」に出席し、様々な呼吸器使用者が存在する事に更に衝撃を受け、前向きな気持ちになっていきました。当時の私は右も左も分からないまま、当会の行事に参加していたのを思い出します。彼の存在は、他の重度障がい者の中でもとてもポジティブ思考であり、生活における色々な事を学びました。

呼吸器を使用している存在をアピールしたり、新しい出会いを求め社会参加したりしていく為の様々な障壁を乗り越えるサポートをしてくれました。彼の行動自体が想像を絶する事が多く、衝撃を受けてばかりで、真似する事もあれば、アレンジする事もありました。そうやって私も外出する楽しさを学び、そして後者（特に地方に住む呼吸器使用者）にサポートしていく様になってきました。

入会当時の呼吸器使用者は、自分の知る限り4名しかおらず、早いもので、頸損連絡会に入会して11年余りが過ぎました。今では10名の呼吸器使用者との連絡網が出来、時々情報交換を行っています。中々お会い出来ない地方の方にお会いするにも遠い事が障壁で諦めざるを得ない事もあります。もし池田さんが存命だったら、障壁を乗り越え会いに行っているのかもしれない。出来る事は限られますが、彼は良く地方に行っていたので、セルフヘルプと言う意味でも、この活動を継続する1人としてこれからも邁進して行けたらと思っています。

彼や他の頸髄損傷者との出会いによって気付かされた事は大きな財産となっています。また彼らに出会わなかったら、今の自分が前向きな気持ちになっていなかったかもしれません。

人生は本当に何が起こるか分かりませんが、健常者だった頃は何不自由なく生きていましたが、頸髄損傷という障害になって色々な人と出会い、考え方や生き方が健常者の頃より、真剣に向かい合えるようになったので、有る意味、良い人生に変わった事に感謝し、今を精一杯生きています。

恩師であった故・池田英樹さんと

